



Save the Children

# 子どもたちへの あたたかいご支援 ありがとうございます

公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン  
教育分野 2023年度活動報告

© @AHMED ALBASHA/Save the Children

すべての子どもが  
質の高い教育を  
受けられるように。

2023年に教育分野へのあたたかいご支援をいただき、ありがとうございました。皆さまのご寄付が、**モンゴル、モザンビーク、イエメン、レバノン、パキスタン、ルーマニア、ウクライナ**の子どもたちへの教育の機会の提供、および教育の質の向上につながりました。心からの感謝をお伝えするとともに、2023年度の活動をご報告いたします。2024年度も引き続きご支援をよろしくお願いいたします。

## 活動の背景

世界の子ども**2.2億人以上**が、教育へのアクセスを阻まれています。

武力紛争や気候変動、その他の危機の影響を受け、**2.2億人以上の学齢期の子ども**が質の高い教育へアクセスできていないと言われています。そのうち約7,200万人が不就学で、約1.2億人が就学しているものの、最低限の読み書きや計算ができないと報告されています。また、紛争や暴力の結果、国内外での避難生活を余儀なくされた子どもたちの数は過去約10年間で2倍以上となりました。受け入れ先の教員・学校の不足や経済的困窮による学用品の未購入、カリキュラム・教授言語の問題などにより、難民の子どもたちの初等教育就学率は約70%、中等教育では約40%に留まっています。他にも貧困のため通学のための交通費や学用品の費用が払えず、家計を支えるために働かざるを得ない子どもたちや、障害があることで他の子どもと一緒に教育を受けられない子どもたちも少なくありません。



## 私たちの取り組み

いかなる状況下でも、**すべての子どもたちが教育を受けられるように。**



セーブ・ザ・チルドレンは、あらゆる困難にある子どもたちが継続して教育を受けられるよう、世界各地で活動を行っています。モンゴルでは、障害の有無や言語の違い等に関わらず、子どもたちが質の高い教育を受けられるための支援を行い、モザンビークとイエメン、ルーマニアやウクライナでは紛争の影響により、厳しい状況に置かれた子どもたちに対して、緊急下の教育支援を行いました。パキスタンでは貧困のため学校に通えない子どもたちに対する就学支援を実施し、レバノンでは、避難生活を送るシリア難民および悪化する社会経済の影響を受けているレバノン人の子どもたちに対し、継続して教育を受けられるよう支援を行いました。

# 「誰一人取り残さない」教育を、小学校から中学校へ

## 【モンゴル】義務教育期間を通じたインクルーシブ教育推進事業

■ **目的** 特別な支援を必要とする子どもたちが、義務教育期間を通して、個々のニーズに応じた指導や教育支援を受けられるようになる

■ **活動内容**

- (1) 特別な支援が必要な小学校5年生\*の中学校進学への支援
- (2) 中学校におけるインクルーシブ教育システムの構築支援
- (3) 保護者の子育て支援
- (4) 非対象校への知見の普及
- (5) インクルーシブ教育推進のための政策提言

■ **事業期間** 2021年3月30日～2024年3月29日



対象地：ウランバートル市、ウブスハンガイ県、ホブド県


\*モンゴルでは1～5年生が小学校、6～9年生が中学校にあたります

### ■ 2023年度以前の事業の進捗

セーブ・ザ・チルドレンはモンゴルにおいて、障害、言語の違い、経済状況やその他の特徴に関わらず、全ての子どもが参加し、ともに学び、可能性を十分に伸ばすことができるよう、個々のニーズへ対応する「インクルーシブ教育」を推進しています。2018年からは、事業対象地域の小学校と、学びに遅れが見られたり一度退学してしまった子どもたちの受け皿となっている生涯学習センターの体制強化と教職員の能力強化、保護者や社会の障害に対する理解促進のための啓発活動などを実施しました。これらの活動の学びや成果のもと、2021年からは、義務教育期間を通じたインクルーシブ教育の普及を目指し、対象を小・中学校に拡大しました。また、関連する法や規程の改訂に向けた働きかけも継続して実施しています。

### ■ 2023年度の活動報告


事業対象を小・中学校に拡大し3年目となった2023年度は、1、2年目で実施した16校の体制を確立し、新たな32校への普及を進め、支援の継続性を確保しつつ、全国に普及させるための活動を開始しました。

 **活動1. 特別な支援が必要な小学校5年生の中学校進学への支援**

中学校進学準備のための教員向け教材の改訂、生徒向けガイドブックの改訂を実施し、それぞれ研修を行いました。対象校が全国普及のモデル校になることを目指しました。

 **活動2. 中学校におけるインクルーシブ教育システムの構築支援**

インクルーシブな環境整備のために、教職員の能力・体制の強化、保護者との連携強化をしました。実施した研修は、オンラインコース化しました。スロープや手すりの設置、トイレへの改修をし、全ての子どもにやさしい学習環境も整えました。

 **活動3. 保護者の子育て支援**

保護者会の能力強化、市民社会組織や行政組織との連携強化に取り組みました。メディアを通じた啓発活動にも取り組みました。

 **活動4. 非対象校への知見の普及**

日本のインクルーシブ教育の現場視察を行うスタディーツアーや、学校に対する支援体制の強化をしました。全国普及に向けた研修や、対象校間だけでなく非対象校も含めた学び合いの場を設けました。

 **活動5. インクルーシブ教育を推進するための政策提言**

政策や規程の改定に向けた要請や、政策決定者と学校の連携向上に取り組みました。また、本事業で作成した研修教材が教員養成カリキュラムに取り込まれるように働きかけました。



特別支援学級での授業実践を学ぶ、スタディーツアー参加者たち（神奈川県、2023年9月撮影）



啓発活動の一環で作成した、Togetherキャンペーンのポスター



# 障害のある子どもに対する**保護者の支援能力**を高めるために

【モンゴル】障害のある子どもを持つ遊牧家庭の保護者・養育者のブレンド型学習モデルによる能力強化

■目的 ウブスハンガイ県およびホブド県において、障害のある子どもを持つ遊牧家庭の保護者・養育者の読み書き計算能力および子どもを支援するためのスキル・態度の向上を目的とするブレンド型学習プログラムのモデルが地方政府とLLEC（Life-long Education Center; 生涯学習センター）により確立される。



対象地：ウブスハンガイ県、ホブド県

■活動内容

- (1) 教材の準備、提供
- (2) LLECに対する研修（2022年度で終了）
- (3) 保護者・養育者に対するブレンド型学習プログラムの提供
- (4) 市民の意識啓発活動
- (5) 地方政府およびLLECとの連携強化

■事業期間 2022年6月6日から2023年6月5日まで

■2023年度以前の事業の進捗

セーブ・ザ・チルドレンの調査によると、モンゴルの6県で遊牧生活を送る人たちの15.3%が、全く文字を読めない状態にあることが分かりました。2022年6月から、モンゴルのウブスハンガイ県とホブド県で、遊牧家庭の保護者60人が、基本的な読み書き計算能力や、障害のある子どもを支援するためのスキルを身に付けられるよう事業を開始しました。

■2023年度の活動報告

2023年は、LLEC職員向け研修教材の改訂・最終化、保護者・養育者向けの事後評価活動、メディアを通じた市民の意識啓発活動、地方政府およびLLECとの連携強化のための会合を実施しました。事業実施の結果、LLEC支部主導の遊牧民の識字率調査と保護者の能力強化支援の継続体制が整備され、また、事業参加者による子どもへの支援が改善したという成果が表れ、2023年6月に本事業を終了しました。

📖 活動1. 教材の準備、提供

ブレンド型学習モデルおよび障害のある子どもを保護者が支援する方法に関し、LLECの教員向けの教材を最終化しました。

🏠 活動3. 保護者・養育者に対するブレンド型学習プログラムの提供

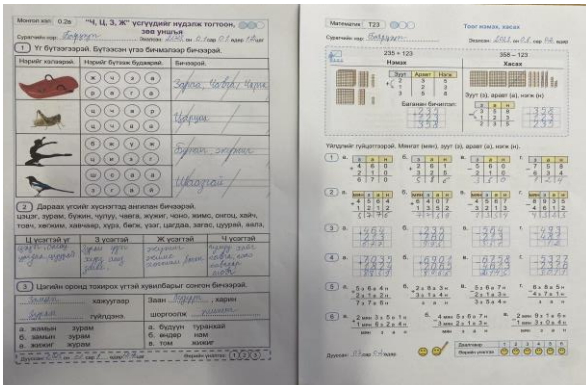
LLEC職員が、事業参加者の読み書き計算能力の測定をしました。

🎓 活動4. 市民の意識啓発活動

事業紹介用パンフレットを作成・配布したほか、ソーシャルメディアを通じて、事業内容や遊牧民家庭の保護者の学習ニーズなどの情報発信をしました。

🤝 活動5. 地方政府およびLLECとの連携強化

各県で地方政府職員、LLEC職員から成るワーキンググループを構成し、事業成果や、事業の締めくりまでに取り組むべき課題を説明しました。



参加者の練習帳（ウブスハンガイ県ズーンバヤンウラン村、2023年2月撮影）

事業に参加したデンブレスレンさんご夫婦と、息子のブルブジャブさんが、共に家庭学習に取り組む様子（ウブスハンガイ県ズーンバヤンウラン村、2023年1月撮影）

# すべての子どもの「学習の継続」を目指して

## 【モザンビーク】国内避難民とホスト・コミュニティの青少年への復学及び学習継続支援事業

■ **目的** 進学または学習継続が困難な国内避難民とホスト・コミュニティの子ども・青少年が質の高い復学、学習継続支援を得ることができる。

■ **活動内容**

- (1) コミュニティにおける啓発活動、事業の周知
- (2) 復学、学習継続支援実施施設の特定・整備

■ **事業期間** 2022年11月1日～2024年4月30日  
(2023年10月31日から事業終了日を延長)



### ■ 2022年度以前の事業進捗

本事業対象地域のナンブラ州では、モザンビーク国内で学校に通えていない子どものうち40%以上(150万人)が生活しており、教育分野における支援のニーズが非常に高い地域です。2022年度は、地域図書館をはじめとした各授業を安心安全に実施できる場所の特定(20か所)と、コミュニティに対する事業開始の周知や教育の重要性に関する啓発活動等を行ってきました。

### ■ 2023年度の活動報告

#### 活動1. 復学、学習継続支援実施施設の特定・整備

本事業では、①地域図書館における基本的な読み書き・計算授業②補習授業③遠隔授業の3つの活動を通じ、初等教育高学年から中等教育における学習の遅れを取り戻すことで、個別の状況に応じた学習継続をサポートしています。授業の開始に向けて、行政とも連携の上、必要なカリキュラムの開発、ファシリテーターの雇用や研修、物資の調達と配布等を行いました。

#### 活動2. 代替授業の実施

上記のとおり、学習環境の整備を終え次第、それぞれ授業を開始することができました。2024年2月の新学期に中等教育への進学することを目指し、現在学習の遅れが懸念される427名の子どもたちが補習授業を受けています。また、学校に通えていない子どもたちを対象とした基本的な読み書き・計算授業に関しても、合計960名が修了する見込みです。また、中学校がない地域で、中等レベルの教育を小学校で受けることができる遠隔授業に関しては、公教育カリキュラムの改定に伴い、遠隔授業のマニュアルの見直しを行政と行っていたことから授業の開始が遅れたものの、2024年1月には開始する見込みです。本事業地では、児童婚率が非常に高く、女子の退学率の高さや進学率の低さが課題となっており、特に女子からノンフォーマル教育や遠隔授業の参加を希望する声が多く上がっています。今後も、上記の活動を通して、子どもたちの復学を促進していきます。



左：基本的な読み書き・計算授業に関する啓発活動(2022年11月撮影)  
右：基本的な読み書き・計算授業のファシリテーターの募集を行っている様子(2022年11月撮影)



## 緊急下でもすべての子どもが 安全な環境で、質の高い教育が受けられるように

イメンやレバノンにおける人道危機への対応として、難民や国内避難民、人道危機の影響を受けた地域の子どもに対する教育支援を実施しました。イメンでは、公立学校に通うことのできない国内避難民の子どもたちに対して、ノンフォーマル教育を実施することで学習継続の機会を提供しました。レバノンではシリア難民とレバノン人の子どもに基本的な読み書きと計算の授業を提供し、また、学習の遅れなどによる退学の高リスク子どもたちには補習授業を実施し、通学の継続や進級を支援しました。

### 【イメン・ラヒジュ県】



課外活動でパズルを完成させた子どもたち  
(2023年5月撮影)



授業を受ける生徒  
(2023年9月撮影)



校舎の修繕を行う保護者会メンバー  
(2023年10月撮影)



世界教師デーにて自身の経験を語る教員とそれを聞く生徒たち  
(2023年10月撮影)

### 【レバノン・北レバノン県】



学用品を受け取る子どもたちの様子(2023年11月撮影)



算数の授業を受ける子どもたちの様子(2023年6月撮影)



基本的な読み書き・計算の授業を受ける子どもの様子  
(2023年11月撮影)



社会情動的スキルプログラムのイベントに参加する子どもの様子  
(2023年7月撮影)

# 緊急下でもすべての子どもが 安全な環境で、質の高い教育が受けられるように

モザンビークやパキスタンでは貧困や学習の遅れなどの理由により学校に通えていない子どもが復学できるよう支援しました。モザンビークでは武力紛争の影響を受けた子どもたちに対して読み書きと計算の代替授業を提供しました。また、パキスタンにおいては貧困のため学校に通うことのできないアフガニスタン難民およびパキスタン人の子どもを必要な社会保障制度へつなぎ、復学支援を実施しています。ルーマニアとウクライナではウクライナ危機の影響を受けた子どもたちに対して放課後活動における学習支援やオンライン授業を提供し、学習が継続できるよう支援しました。

## 【モザンビーク・カーボデルガド州】



学用品キットを受け取る子どもたちの様子  
(2023年3月撮影)



代替教室で絵を描く子どもたちの様子  
(2023年9月撮影)

## 【ルーマニア・コンスタンツァ県】



ウクライナとルーマニアの子どもたち合同で課外活動を行った様子  
(2023年7月撮影)



放課後活動に参加する子どもたちの様子  
(2023年9月撮影)

## 【パキスタン・バロチスタン州】



研修にて子どもの力の引き出し方について  
協議する教員と提携団体のスタッフ  
(2023年9月撮影)



学習キットを手に入れ喜ぶ子ども  
(2023年9月撮影)

## 【ウクライナ・ミコライウ州】



デジタル学習センターでトレーニングを受ける教員たち  
(2023年7月撮影)



移動式学習支援を受ける子どもたち  
(2023年10月撮影)



## 【モンゴル】

## 通常学級に通うことは夢であり挑戦だった ～アマルタエヴァンさん（仮名）のストーリー～

ウブルハンガイ県アルバイヘール村の中学校に通うアマルタエヴァンさん（9年生）は、特別支援学級で学んでいましたが、2年生の時に普通学級に転籍しました。

「入学当初は、他の子どもたちが私をいじめたり、差別したりするのではないか、先生たちは私の言っていることを理解してくれるだろうか？という不安がありました。」と、アマルタエヴァンさんは当時を振り返ります。「しかし、しばらくすると、友達もたくさんでき、学校に行くのも、放課後家に帰るのも楽しくなりました。助けてくれたり、理解してくれたりする友達に感謝しています。」と話します。アマルタエヴァンさんは、水上模型クラブに所属したり、芸術鑑賞会で劇の発表に参加したり、クラスメートと社会奉仕活動をしたりと、課外活動に活発に参加しています。最近では、ナリンテル村で開催された、水上プラモデル選手権の「未来の技術者」コンテストで特別賞を受賞しました。

クラス担任のオドゲレルさんは、「アマルタエヴァンさんは、当初クラスメートとの行き違いや、言葉の発達が不十分なために自分を表現できないなど、困難を感じていました。しかし、それが逆に友達を作り、お互いをもっと理解するきっかけになりました。彼はクラスメートを危険から守ってくれさえます。」と語ります。

この学校では、2021年の事業開始以降、障害のある生徒の数が54人から64人に増加しました。障害のある子どももいない子どもも、ともに学び、ともに成長する環境が学校に根付いてきています。



アマルタエヴァンさんと、製作した水上プラモデル（ウブルハンガイ県、2023年1月撮影）

## 生徒のことをよく理解し、褒め、励ますことが第一歩



ホブド県の中学校 地理教員、ニヤムツォージさん

ホブド県の中学校教員、ニヤムツォージさんが担当する中学1年生のAさんは、自閉症スペクトラム障害を持っています。「彼は、小学5年生から中学校（6年生）にかけて、先生や友達とのコミュニケーションや、座って授業に参加することに困難を感じていました。周囲が『お行儀良くしなさい』というと、怒りっぽくなり、廊下を歩き回ることもありました。

私は、彼をよく知り、彼に合わせたサポートをしたいと思い、普段の生活や彼の家族についてよく調べました。すると、家庭ではあまり会話がなかったことがわかりました。クラス担任として、温かい関係性を作り、彼の行動に対して叱るよりも、良いところを見つけて褒めたり励ましたりすることを心掛けるようにしました。クラスメートにも、Aさんをどのようにサポートできるかを伝え、他教科の教員たちにも、Aさんのことを褒め励ます1か月間のキャンペーンに協力してもらいました。結果、彼が教室を飛び出そうとするなどの行動が少なくなり、自分の席にじっと座り始めました。

Aさんの個別教育計画（Individual Education Plan; IEP）作成にあたり、個別のニーズを考慮し、何に興味があるのかを明らかにし、関連する教科の教師と一緒にIEPを作成しました。

今では、Aさん自身のイライラも減り、物事に積極的になりました。クラスメートとは、よく笑い、明るく、仲良く過ごしています。英語と絵を描くことが得意です。」

## 保護者・養育者に対するブレンド型学習プログラム～参加者の子どもたちの声～

ホブド県の対象村で学習プログラムに参加した保護者の子どもに、プログラム参加後の変化について聞いてみました。「お母さんは読み書きを学んで、私と一緒に勉強してくれるようになりました。妹や弟の宿題も一緒にやっています。以前は、宿題をやったかどうかさえ聞かれませんでした。学校の制服も全部買ってくれました。前は、制服のズボンを持っていませんでした。でもお母さんが買ってくれました。また、お母さんは夕方になっても私と妹や弟から離れません。以前は、私たち3人を置いて、どこかにでかけていました。以前より私たちに気を配り、気遣ってくれるようになったと思います」  
「大人になってから読み書きを学ぶのは遅すぎる」と感じてしまっ方も多いようです。しかし、本事業を経て子どもよりも大人のほうが早く読み書きを習得できることがわかりました。保護者が基本的な読み書き計算能力を持っていないと、子どもが教育を受ける機会が失われてしまったり、家族の日常生活にも支障をきたしたりすることがあります。今後は地元の生涯学習センターが中心となって取り組みを継続し、保護者・養育者と子どもたちを支援していきます。



集団指導の様子（季節ごとに異なる、遊牧家庭に必要なものの数を数える授業）（ホブド県ダルビ村、2023年4月撮影）



## 【モザンビーク】

### ラーニングキャンプを通じた基本的な読み書き・計算スキルの向上 ～アナスタシアさんのストーリー～

アナスタシアさん(13)は、本事業地エラティ郡で祖母と弟(5)と一緒に住んでいます。祖母は農業に従事し、弟は学校に通っていません。アナスタシアさんは、小学校6年生になったばかりです。7歳で学校に通い始めたため、授業についていくことに困難を感じていました。当時、読むことや書くことが難しく大変だったと彼女は振り返ります。アナスタシアさんは、セーブ・ザ・チルドレンが地域図書館で実施しているラーニングキャンプに2023年9月から参加することになりました。以降、彼女は読み書きのスキルが向上していることを実感するようになり、これまで難しかった勉学を一步前進させることができました。今では、算数のスキルの改善も見られるようになりました。このような成果は、単に勉学の道筋を築くだけではなく、彼女自身が誇ることでできる真の成果となっています。



アナスタシアさん(2023年11月撮影)

「ラーニングキャンプに友達と参加するようになってから、読み書きのスキルが向上していることを実感します。ファシリテーターが書き取りレッスンを行うとき、今では彼が言ったことを書きとれます。他の人と同じ速さでとはいきませんが、書きとれるのです。」  
アナスタシアさんは、恥ずかしそうに微笑みながら話した。

アナスタシアさんは、読み書きや計算のクラスは、カジュアルでとても楽しい方法で行われ、誰もが積極的に参加しやすい環境になっている点気に入っていると話します。このような堅苦しくない参加型アプローチによって、彼女は学校で直面する課題を克服する自信がもてるようになり、特に周りの女の子など、地域の他の子どもたちにもラーニング・キャンプへの参加を勧めています。

私は地域図書館に来ることが好きです。みんなで遊んだり、ゲームをしたり、ファシリテーターが読み聞かせをしてくれたり、本を借りて読書の宿題をもらったりします。家に帰ったら宿題を友達と一緒にして、私が学んだことを教えています。弟は学校にまだ通っていませんが、ラーニングキャンプで教えてもらったゲームの遊び方を教えたり、一緒に歌を歌ったりしています。



アナスタシアさんとクラスメイトのアウガスタさんとエマさん(2023年11月撮影)

アナスタシアさんが通うニクブ小学校の教育部長であり、ラーニングキャンプにも参加するネリト・アルマンドさんは、子どもたちが読み書きや計算の能力を伸ばすことを見ていて、やりがいのあることだと話します。彼は、この取り組みが質の高い安全な学習環境を強化するという付加価値をもたらすと考えています。特に、本事業地のナンブラ州では、教育機会へのアクセスがあったとしても、特に女の子は、児童婚や家事の手伝い等の文化的な規範や慣習によって学習を継続することが難しいことも多いです。アルマンドさんは、このような困難に直面する女の子がラーニングキャンプを通じ学習成果を伸ばしていくことに期待を寄せています。



ネリト・アルマンドさん(2023年11月撮影)

セーブ・ザ・チルドレンの取り組みは称賛されるべきだと思います。地域の子どもたちだけではなく、学校に対する支援も行っているからです。セーブ・ザ・チルドレンのインクルーシブで楽しい教授方法は、読み書きや基本的な計算を学びやすくし、彼らが学業で成功できるよう貢献しています。特に女の子は、文化的な問題から取り残されてしまいましたが、今では学校や学習の機会にアクセスできるようになり、大きな付加価値をもたらしています。  
(ネリト・アルマンド ニクブ小学校 教育部長兼教員)